近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

三方よし（さんぽう）

第51号
2024／3

藤樹書院（高島市安曇川町上小川）

CONTENTS

日本の陽明学の祖　中江藤樹の教えに学ぶ …… 2
地域で守り続ける藤樹書院 …… 5
受け継がれる藤樹先生の教え …… 6
広域で活躍した高島の先人 …… 8
てんびん棒 …… 8

日本の陽明学の祖 中江藤樹の教えに学ぶ

2024年３月16日　高島市中江藤樹記念館および周辺関係施設

近江聖人といわれた中江藤樹先生について、なかなかその神髄にまで入って学ぶことがなかった三方よし研究所では、昨年は藤樹先生の教えや、その後石門心学という商人の精神土壌に関した教えなどの勉強会を継続開催してきました。そして、今回は現地で生の先生の教えに触れることを計画しました。

感ずれば必ず応ずる

三方よし研究所理事長　塚本喜左衛門

少し早い目に到着しましたので、陽明園をはじめ藤樹神社等周辺を拝見させていただいておりました。この周辺はどこもすがすがしく整備されており、さすが藤樹先生の教えが漂う地域であると実感しておりました。

ここは、藤樹先生の３８０年前の教え「感ずれば必ず応ずる」が連綿と続いている素晴らしい藤樹の里の気風を醸し出しておられます。中国の「儒教、陽明学」が、中江藤樹先生によって「武士や政治家」の学問となり、さらには日本的な情緒にあう「庶民の行動倫理」として確立されたと思います。もちろん中国からすると、それは「日本式の儒教であり、陽明学なのだ」といわれそうですが、中江藤樹先生は儒学に傾倒して、さらに朱子学を学び、陽明学へ至る学問系譜を作ってこられたことは実に興味深いものがあります。本日のお話は大層期待しております。

高島市内小学生が書いた論語などの作品が展示された「了佐てらこや小学校」を会場に講演会を開催

中江藤樹の生い立ちと学問への道へ

中江　彰氏

私は、旧安曇川町の職員でしたが、少し勉強せよといわれ、この記念館に長年勤務してきました。

本日は藤樹先生がどのような方であったか、そしてその教えがどのように広まっていったかということを述べさせていただきます。三方よし研究所様からとりわけ近江商人に与えた影響などがあれば話してほしいとのご要請がありましたので、最後にこの点にも触れてみたいと思います。

藤樹先生の生い立ち

藤樹先生は江戸時代前期、慶長13年3月7日（１６０８）に小川村の農家の長男に生まれています。名前は与右ヱ門ということから、子供用の普及用書物には「よえもん」という名称をよく使います。

祖父は、加藤家に仕える鎌の名人でしたが、藩主の国替えで米子に住んでおり、父はなぜか農業を営んでいました。

転機が訪れたのは9歳の時です。与右ヱ門は伯耆米子藩主・加藤氏の１００石の武士である祖父・徳左衛門吉長の養子となり、米子に行くことになりました。さらに加藤氏が元和2年（１６１７）伊予大洲藩（愛媛県大洲市）に国替えになり、祖父母とともに大洲へ移住し、この頃より『大学』を読み始めています。

元和8年（１６２２）に元服して「中江与右ヱ門惟命」と名乗りますが、これを見届けたかのように、徳左衛門は亡くなり与右ヱ門は家督１００石を相続して大洲藩士となりました。

その後も与右ヱ門の学問への情熱は衰えるどころか一層拍車がかかったのでしたが、その間に郷里の父もなくなり、ひとり残された母のことが気がかりでした。ところが、藩からのお許しを頂くことができず悶々としつつも「論語」などの漢籍を何度も読み続けていました。

そしてついに、寛永11年（１６３４）、27歳の時、母への孝養と健康上の理由により藩に対し辞職願いを提出したのでした。ところが、藩からは拒絶され、お咎めをうけることもやむなしと、しばらくは京都に潜伏していましたが、ついに近江に戻ってきました。つまり脱藩を決行して

いるのでした。

郷里に戻ると、生活の糧を得るために小さな酒屋をしながら私塾を開きます。これが藤樹書院のスタートです。庭に大きな藤の木があったことから村人がいつしか「藤樹先生」と呼ぶようになったのです。

有名な「アカギレ膏薬」の話は脱藩する前に一度郷里に帰った時に、「学問の途中に勝手に帰郷することとは何事」と母からの諭しで屋敷に入ることなく大洲に戻った時のエピソードです。

藤樹先生、郷里で村人への講義を始める

藤樹先生は最初、朱子学に傾倒しましたが、次第に陽明学の影響を受けます。『大学』という書物では「格物致知」の解釈を王陽明が「**良知を致す**」と行動的な解釈をしていますが、これに対して、藤樹先生は「**良知に致る**」と読み、内的な精神性を求める方向をしめしています。ここには、身分の上下をこえた平等思想に特徴があり、このことは、武士だけでなく農民、商人、職人にまで広く浸透していきます。

藤樹先生はいつも、村人にわかりやすく話したので大勢の人が集まってきました。遠くからも教えを求めて手紙が届くのですが、これに対しても常に丁寧な返事をされています。このようにして藤樹先生は、自身で学んだ孔子や王陽明の言葉を平易な言葉としてこの地から広めていったのです。

藤樹先生の私塾で学んだ一人が医者の大野了佐です。なかなか学問が進まなかった了佐のために自ら医学を勉強し、それを自ら書き写し、彼を指導したことで了佐は医者になったのでした。この「了佐てらこや小学校」は子供たちが学ぶ場所としてこのように命名されています。

中江（なかえ）　彰（あきら）氏

1953年、大阪府堺市生まれ。
佛教大学文学部史学科卒（東洋史学）。
花園大学大学院文学研究科修士課程修了（仏教学）。
元近江聖人中江藤樹記念館長。

熊沢蕃山、弟子入りのきっかけとなった馬方又左衛門の逸話

藤樹先生が亡くなってから百年以上後に、橘南谿という人が日本各地を旅して見聞したことを『東遊記』『西遊記』としてまとめていますが、『東遊記』には熊沢蕃山が入門した時のいきさつが書かれています。

加賀の飛脚が、二百両を預かり、京に行く途中、河原市（高島市新旭町）で馬を雇って榎の宿（大津市志賀町）に泊まったところ、持っていたはずの２００両がないことに気が付き、えらいことになったと、頭を抱えていました。その時、先ほどの馬方がやってきて、「お忘れ物」としてなくなったと思っていた２００両を届けてくれたのです。飛脚はすっかり喜び、２００両の中から馬方に15両を「礼に」と差し出したところ、馬方は頑として受け取りません。押し問答の末、「それでは駄賃として２００文いただきます。」といい、その駄賃で酒を買い、宿のみんなとともに楽しく酒を酌み交わしたのでした。

この馬方の行動に、飛脚は感心して馬方の素性を問うと「名乗るほどのものではありません。近くの小川村の藤樹先生からいつも『親には孝行をしなさい』『主人は大切にしなさい』『人のものは取ってはいけない』『曲がったことをしてはいけない』と教えていただいています。だから今回のお金も私のものではないのでいただくことはできないのです」と言って帰っていきました。その後、京の藩屋敷に行った飛脚がいつもの宿でこの話をしていた時、たまたま話を聞いたのが熊沢蕃山でした。蕃山は早速に藤樹書院を訪ね「どうか門人にしてください」と頼みこんだのですが、藤樹先生は、門人はいらないと拒み続けたのでした。しかし、蕃山のあまりの熱心さについに許可し、蕃山は熱心に勉学に励み、家族の住む近江八幡の桐原村に帰って、なお一層の自学自修に励み、学問の基礎ができました。

蕃山は、岡山藩主池田光政のもとに戻り、学問を実際に生かし、藩主の光政も藤樹先生に教えにいたく感動され、のちの天下の名君といわれる善政をおこなっています。

諸国産物回しを教示された豪商の祖「久次郎」

お待たせしました。最後になりますが、近江商人に関わるエピソードです。『近江神崎郡志稿』に掲載されています。

江州位田村（現東近江市五個荘町竜田）の松居久次郎は祖父の代から農耕を行っていました。ところが生活は苦しく、毎日の生活から逃れるために江戸の商家に奉公することを決心しました。そしていよいよ、明日は江戸への出発という日の夜、不思議な夢を見たのです。

明け方前ぐらいのことです、夢枕に見たこともない人が現れ、「この村の氏神である。あなたは江戸で奉公しようと思っているようだが、それはよくない。それだけの決心があるのなら農業の合間をぬって土地の産物を売買することがよい」というのです。これを聞いた久次郎はびっくりして跳び起き、急いで村の氏神に参詣すると社殿がすこし開いていました。氏神様がやってきたのは本当だったのだ。あの夢は本当だ。きっとそうに違いない、「神のお告げには従わないと、えらいことになる」と思い、江戸に行くことをやめ、早速に手許金を集め、特産の編み笠を買い込んで大阪方面に行商に出かけることにしました。

そして商い始めの第一日目、てんびん棒に編み笠をくくり、野洲川近くまで来て、一服しようと腰を下ろしました。するとふと座った場所に、大きく膨れた白い袋が置き忘れてありました。恐る恐る開けてみると、中には73両の金子が入っています。「これを忘れた人はさぞかし困っているだろう、そうだ、わかりやすいようにしておこう」と、早速天秤棒の端にこの袋をぶら下げ、道中を進んでいたところへ、棒の先の袋に気が付いた僧侶が「これは拙僧のものに違いない」と近づいてきました。二人はともかく近くの宿まで同行し、袋の中身を確認すると間違いなく僧侶のものだったことがわかりました。

喜んだ俊恵と名乗る僧侶は礼にと10両を渡そうとしたのですが、久次郎は固く拒み、「礼はいりませんが、当家は大変貧しく、暮らしに難渋しています。できることなら我が家の子孫繁盛、寿命長久を祈念いただきたい」と申し出ました。俊恵は「当然です」と快諾し、「この度のご恩報謝のため徳永代護法修行を必ず請け負います。お心を安んじてください」とお互い礼を言いあい、その一夜をともにしたのでした。

この話は人づてに広まり、久次郎は「正直な近江の商人」としての信頼を得られ、その後も正直・勤勉・質素・倹約を旨として精励した事から、商売の基礎を固めることができたのです。

実際、藤樹先生の教えを近江商人の人たちがどのように学んでいたかは、わかりませんが、このようなわずかな例を見ることができます。いろんなエピソードのなかには、藤樹先生の教えが庶民の間で広くいきわたっていったことは間違いがないことと思います。

藤樹先生は『鑑草』の中で「善悪の報いは、谷に声をあげるがごとくなれば、善を思い善をおこなうには、かならず善にむくいあり。悪を思い、悪をおこなえば、かならず悪のむくい有。これ誠に天地感応の妙理なり」といわれています。

忘れ物の上の埃が積もる

最後になりますが、原念斎という人が『先哲叢談』で興味深い話を記しています。

「藤樹先生の住んでいる郷党のひとびとは、老若男女を問わず、その徳に深く感化されていた。利にさとい商売人といえども、人としての道を大切に守った。街道沿いの宿屋や茶店のごときも、お客の忘れていったものがあれば、かならずその店の棚の上において、そうした持ち主がふたたび取りに来るのを待った。何年も、そのままにしておいたので、忘れ物の上には埃や土が積もっていた。高価なキセルや煙草入れといえども、ついに自分のものにすることはなかった」とこの土地のようすを伝えています。

松居久次郎のような商人がよその土地でもって商いを展開できたことは、近江聖人中江藤樹先生の教えが広まり、次第この土地の人々の心に浸透していったからなのでしょう。

松居久次郎編笠行商図
（個人蔵　画像提供：東近江市近江商人博物館）

～編笠行商からやがて豪商へ～

中江彰先生の話の中に登場した久次郎は、その後久右衛門と改名。編笠行商から始まった商いは次第に栄え、久次郎の息子も父の背中を見て育ち、さらに業容を広げ、３代目の時には４人の息子にそれぞれの分配金を与えて分家させた。その３男が、「星久」で知られる松居久左衛門である。松居久右衛門旧宅は、児童書の老舗出版社福音館書店の松居直（1914～2022）さんの母すみさんの生家。松居久右衛門家旧宅は、長い間、空き家状態が続いていたが、2023年４月にマーチャントミュージアム教林坊別院としてオープンした。

■マーチャントミュージアム教林坊
滋賀県東近江市五個荘竜田町 369-1
連絡先：090-3055-8183

地域で守り続ける藤樹書院

樹式位牌を背に説明いただいた上田藤一郎さん。高島藤樹会の初代会長で、元中学校校長、英語での解説は定評があり、当日もユーモアたっぷりでわかりやすくご案内いただいた。

内村鑑三が明治時代に『代表的な日本人』の中で中江藤樹を挙げている。そしてここには上小川村について「1608年、琵琶湖の西岸、比良ケ嶽が近く、その影を鏡のような湖面に映しているところに、これまで日本の生んだもっとも徳の高い進歩的な思想家が生まれました（中略）学問や思想を求めることは、世の実際家の追い求める価値のないものと考えられていた時代でした」と記しています。

「偉人は水清き所に生まれる」といいますが、藤樹屋敷の前には清く美しい小川が流れ、そこで優雅に泳ぐ緋鯉は藤樹書院を訪ねる人たちの目を楽しませてくれます。

藤樹先生の墓所をお参りした、わたしたちは藤樹の里、高島市安曇川町上小川の人々がお守りしている藤樹書院に向かい、上田藤一郎さんから、書院の運営や行事についてご説明いただきました。

大火の中、持ち出した扁額

この藤樹書院は上小川の人々がお守りしている施設です。大洲からこの地に戻られた藤樹先生は、この地に塾を開かれ、多くの人がその講義を聞きにやって来たので、最初の建物はたちまちに狭くなり、その後、村の人たちが新築したのですが、その半年後に46歳の若さで慶安元年（1648）に藤樹先生は亡くなられました。大塩平八郎も訪れ、感銘を受けたこの書院でしたが、明治13年（1880）の大火で近在の農家34戸と共に焼失し、現在のものは、明治15年（1882）に再建され、大正11年（1922）に国の史跡に指定されました。

明治の大火の際には、村の人たちは自分の家が焼けているにも関わらず、大火のなか、必死の思いで運び出したのが「致良知」の扁額（写真）だったのです。「鳥虫篆」という篆書の一つで「致良知」と書かれています。

ここでは、藤樹先生の命日にあたる9月25日に儒式の祭典が厳かに行われます。この祭典は昭和55年（1980）に無形民俗文化財の指定を受けていますが、地域の人々が裃姿で儀式を執り行います。

この書院では、このほかにいずれも儒式で藤樹先生が9歳の時に自らの志を表明したことにちなんで旧安曇川町内すべての小学校4年生全員が自分の夢を書いて神主に備える「立志祭」を3月7日に行わっています。また、10月27日の藤樹先生の三男常省さんの命日には常省の生涯を偲ぶ「常省祭」が執り行われています。いつもこの地域の人々の生活の中に藤樹先生への熱い思いが息づいているのです。

書院焼失時に村人が持ち出した「鳥虫篆」という篆書の一つの「致良知」の扁額

毎年、藤樹先生の命日の9月25日に特別の祭典次第で執り行われる「樹式祭典」（画像提供：サンライズ出版）

受け継がれる藤樹先生の教え

桜美林大学を創設した清水安三先生は、藤樹祭に参加した時の感動から「学而事人（学んで意図に事える）」という理念を貫いている。また藤樹記念頌徳会が縁で安曇川に居を構えた松本先生など、この土地の人々の藤樹先生への敬慕は、多くの人々に引き継がれ今日につながる。ここでは、藤樹先生の教えに感化された人々を追ってみることとする。

実践した「学而事人（学んで人に仕える）」の精神　清水安三（1891～1988）

桜美林大学の教育理念は「隣人に寄り添える心を持つ国際人の育成を目指して」である。創立者清水安三は、高島郡新儀村（現高島市新旭町）に生まれ6歳の時、藤樹祭に参加した時の感動を忘れず初志貫徹、桜美林大学を創立した。同志社大学でウィリアム・メレル・ヴォーリズに出会い、その後、宣教師として中国に派遣され、北京市で藤樹書院のような学園にしたいと思い崇貞学園を創立する。貧民街の少女たちに勉強を教え、両親を通じて社会を変える事業を行ったが、敗戦ですべてを失うも、戦後東京に桜美林大学を創設、人に奉仕するよう努力するべきであるという「学而事人」の趣旨の教育方針を貫く。

崇貞学園開設3年後には、アメリカ留学を決意し、オハイオ州オベリン・カレッジでジャン＝フレデリック・オベリンの教育思想に出会った。「学而事人」の教えは、実はこのオベリンが提唱した〝Learning and Labor〟の思想に基づくものであった。

安曇川町での初等教育で「良知に致る」を定着させた　松本義懿（1897～1976）

石川県に生まれ広島文理科大学に進んだ松本は、ここでの「藤樹頌徳会」が縁で、滋賀県立藤樹高等女学校（現高島高校）の初代校長に就任し、以後県内の中学校で教鞭をとった。昭和27年から42年までは高島郡教育会長を務めたが、とりわけ「立志祭」※1を学校行事として根付かせ、安曇川町の初等教育目標として「良知に致る」の思想を定着させ、小学校副読本『藤樹先生』刊行した功績は大きい。

晩年は上小川に居を構え、はがき通信「小川村だより」を謄写印刷で発行。人を説得するというものではなく、自らの生き方と絡め、藤樹の言葉をつぶやくように原紙に向かっていた。

小川村だより11号には「青年時代にはペスタロッチに救われ、国歩艱難時代には聖徳太子に励まされ、今は藤樹先生に慰められている」と記す。『近江の先覚第2集』（滋賀県教育会）では、「もし松本が戦後安曇川町に居を定めなかったならば、中江藤樹は浅見絅斎※2と同じように忘却のかなたへ追いやられてしまったであろう。」と記されている。

陽明園
昭和61年（1986）から続く、王陽明（1472―1528）先生の生地、中国浙江省余姚市と、日本陽明学の祖・中江藤樹先生の生地である旧安曇川町との友好交流を記念して建設した中国式庭園。
陽明門の篇額の題字は、すべて余姚市文聯名誉主席・胡丁氏の揮毫。中国から輸入した建築資材が使われている。

※1 立志祭
立志祭は、中江藤樹が9歳で学問を始めた、と言われていることにちなみ1908年から続く旧安曇川町の行事だったが、現在では、高島市内全小学校（16校）が、この日に児童に志を発表させたり、藤樹について学ばせたりする。当日、藤樹書院には近隣の青柳小、安曇小などの児童が訪れ、藤樹の教えについて学ぶ。

※2 浅見絅斎（1652～1712）
高島市新旭町太田出身の儒学者。著書『靖献遺言』は、諸葛孔明ら中国の忠臣義士の行状について記し、尊王思想の書として日本人に最大の影響を与えたと考えられている。梅田雲浜、吉田松陰が愛読。勤王の志士の必読書と呼ばれ明治維新に大きく影響した。また神風特攻隊の隊員に読む者が多くいたとされる。

天台真盛宗玉林寺門前の儒式墓所
中江藤樹先生、先生の母、三男常省が眠る

大正8年(1917)に創建された藤樹神社
「論語と算盤の一致」を一貫して主張した渋沢栄一は実践を重んじる陽明学に共感し、藤樹神社創立資金として大金を寄付し大手財閥にも寄付を呼び掛けている。創建後には「道従実学存」などの墨書を藤樹神社に奉納し、藤樹神社創立協賛会顧問に就任している。

藤樹研究の基礎的資料を編纂した
岡田季誠（?～1747）

藤樹先生の高弟岡田仲実の第二子として生まれた季誠は、常省門下に入り勉学に励み、藤樹先生の遺稿をまとめることを志し、ようやく草稿を完成させて序文を常省に依頼したが、不幸にも常省の居宅が火災に見舞われ草稿は焼失する。それでも季誠は失望することなく原稿を再度整え完成させた。後年、これらは藤樹研究の貴重な基礎資料として高く評価されている。そして大正8年(1917)藤樹神社建立時に小川喜代造によって編纂された『藤樹先生全集』の底本となっている。

藤樹書院の守護役
志村周次（1812～1837）

藤樹先生亡き後の藤樹書院は、門弟志村吉久とその子孫が主として守ってきた。吉久の末裔の周次が医業の傍ら細々と書院を守っていた天保3年(1832)の夏、陽明学者の大塩平八郎が初めて書院を訪れた。この時「肝心な藤樹の教えが比良の雪のように流滅している」と嘆いた。

そしてその後、大塩は、5回にわたり書院を訪れるようになると、小川村はにわかに活気を取り戻した。周次はもとより大溝藩主や好学の藩士さらには近隣の有識者がこぞって教えを乞うようになった。

ところが天保8年(1837)突如、平八郎は一揆をおこす。すぐさま鎮圧されたが、一味として参加した周次はその後いくえ不明となり非業の最後遂げたという。享年26歳だった。

『藤樹先生全集』を編纂した藤樹神社宮司
小川喜代造（1869～1936）

喜代造はマキノ町(現高島市マキノ町)に生まれ、明治30年(1897)に藤樹自筆の著書を秘蔵している上小川の小川家に入籍する。この年は藤樹没後250年にあたり盛大な祭典が挙行され、これを期に喜代蔵は藤樹研究を始め、書簡類を集めた『景暮録』を作成する。

明治38年(1905)藤樹書院が郡役所の運営となり藤樹図書館が設置されるとその司書となる。

大正になって藤樹神社創立協賛会が発足すると藤樹神社の創建とともに『藤樹先生全集』の刊行に尽力し、大正13年からは藤樹神社の社司を勤め、生涯を藤樹先生の顕彰にささげた。

なお、藤樹神社の創建は高島の人々の悲願であったが、大正7年に巡視でやってきた森正隆知事が住民の熱意を受け止め、翌年には協賛会が設立し、この企画遂行は高島郡長に任じられた佐野眞次郎が指揮を執った。協賛会では、藤樹神社の創立、藤樹書院の建築、藤樹全集の刊行の事業を県内はもとより全国からの資金募集で進められた。

五事を正す

中江藤樹先生は、人としての大切な道として「致良知」を説かれたが、これを具現化するために「五事を正す」を示されている。

五事を正す

- 【貌(ぼう)】愛嬌の心をこめてやさしく和やかな顔つきで人と接しましょう
- 【言(げん)】相手に気持ちよく受け入れられるような話し方をしましょう
- 【視(し)】愛敬の心をこめて暖かく人を見、物を見るようにしましょう
- 【聴(ちょう)】話す人の気持ちに立って相手の話を聞くようにしましょう
- 【思(し)】敬愛の心を持って相手を理解し思いやりの心をかけましょう

広域で活躍した高島の先人

高島商人は、八幡商人や日野商人・湖東商人のように諸国産物回し商いをすることなく、その多くが南部藩の振興に尽力したことで知られ、高島市内には商人たちの痕跡はほとんど残っていない。ところが、この地から広く世界を目指した人たちが誕生している。

1996年現在の高島市内、大溝藩総門付近の旧小野家。すでに取り壊されている

小野組

南部藩の城下町建設に大いに活躍した高島商人は、今も盛岡の経済界で活躍している人が多い。特に旧安曇川町南市は古くから商人が活躍していたこともあり、多くが盛岡に出かけている。明治初期に第一勧業銀行設立に関わった小野組だったが、今ではその痕跡をかの地で見ることはできない。

チベット近代化に尽力　青木文教

高島市安曇川町(常磐木村)の正福寺に生まれ、仏教大学(現在の龍谷大学)に在学中、大谷光瑞に抜擢され秘書となり、ロンドンに留学した後インドの仏跡調査に従事する。明治43年(1910)、チベット国王ダライ・ラマ十三世に謁見し、入蔵の許可を得て、大正元年(1912)単独ヒマラヤ山脈を越え、チベットの首都ラサへ向かう。ラサでは、貴族の住宅に住みチベットの言語をはじめ歴史文化の研究をおこなう一方、国王の教学顧問として、チベットの近代化に尽力する。

蝦夷地に出向いた高島の人　馬場正通

高島市安曇川町青柳(東万木村)馬場三郎助正利の三男として生まれ、享和元年(1801)2月25日から10月10日の間、蝦夷地、国後島を探検し、蝦夷地の事情に通じるようになる。文化元年(1804)箱館奉行羽太正養に仕えて、箱館へ行き蝦夷地に通用させる新銭について調査し『造幣策』を著わし幕府に建議した。しかし、金、銀、銅の流出をおそれる幕府の政策は、蝦夷地に鉄銭以外の通用を許さなかった。また正通は箱館に学舎を開いたが、間もなく病のために江戸に帰り、文化2年(1805)この世を去った。

蝦夷地を探検した　近藤重蔵

寛政10年(1798)から文化4年(1807)の10年間に、クナシリ島、エトロフ島などの蝦夷地を探検し、探検後、幕府の紅葉山文庫の書物奉公に抜擢される。しかし幕府の要人と意見が合わず左遷され、さらに長男富蔵守真が起こした事件の監督不行届責任を問われ、大溝藩分部家にお預けの身となった。文政10年(1827)重蔵は江戸屋敷から高島へ護送されるが、当時の藩主であった分部光寧は重蔵を鄭重に遇し、重蔵もそれに応え、大溝藩士と親交を深め『江州本草』30巻を著し、文政12年(1829)59歳で生涯を終えた。

てんびん棒

三方よし講座終了後、本年度末で残念ながら閉館が決まった高島歴史資料館に立ち寄った。

ここからすぐ北に鴨稲荷山古墳がある。被葬者は第26代継体天皇を擁立した近江三尾氏の族長と推定され、出土品から半島との交易が示しているという。資料館の展示物は残念ながらレプリカであるが、痕跡を見ることはできる。かつては高島商人についての相当な展示もあったように記憶しているが、ほとんど痕跡はなかった。

資料館から北上すると継体天皇の胞衣塚、天皇橋、安閑神社の神代文字が続き、周辺には多くの古墳群が点在する。

高島市には古代の遺跡が多いが、市内各地の資料館はすべて藤樹記念館の改修によってここに統合されるという。果たしてどの程度地域の文化財が継承されるのであろうか、気になるところである。

淡海歴史回廊構想の中で『湖西の湖辺(うみのべ)の道』の編集に関わったとき、高島市内の奥深い歴史文化の存在に驚いたが、少しずつそれらの痕跡が薄らいでいくことを危惧しつつ帰路に向かった。

第51号　発行／特定非営利活動法人三方よし研究所　〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町六五五―一　TEL〇七四九(二二)〇六二七　E-mail office@sanpo-yoshi.net　URL https://www.sanpo-yoshi.net/